「私」は一体、何に対して過ぎ去るのか

ヤマダヒフミ

「あの経験が私に対して過ぎ去って還らないのなら、私の一生という私の経験の総和は何に対して過ぎ去るのだろう」(小林秀雄　「感想」)

人文系の秀才ならば、個人という経験は類という経験の一部に吸収される、と断言するのかもしれない。だが、個人というもの、自分というものは、たとえ、その通りだとしても、一つの実在であり、一つの意思である。ここには、学問の進歩が見過ごしているものが沢山ある。個人の苦痛を考慮した進歩史などはありえないのかもしれない。

人は、自分というものに生まれつく。これは唯一無二のものだが、社会にとってはそうは見ない。彼は、ある無数の群れの一つにすぎない。ある一人のバイト君ーーー例えば、私ーーーは、いくらでも代わりが効くものだ。

そして、その状況は、おそらく近年、更に加速化して、個人の領域まで膨らんできた。彼氏、彼女、友人、全てが取り替え可能である。自分の子供を数値で計り、自分の恋人の年収を数値で計る。全てが交換可能な世界にあって、私達は、もっとも高い価値になろうとしている。そして、その先には、万人に愛される人間という、いわばメディアが作り上げた虚像ができあがるわけだが、この人間の空虚は大きい。この人間は、あらゆる交換可能なものの最後に現れる人間ーーーそれは偶像であり、端的に言って、もはや人間ではない。彼は彼でない、一片のかけらも彼でないからこそ、それほどの途方もない価値が得られる。

この、全てが交換可能な世界において、私は何を考えるか。また、一体、何を考えれば良いか。私はーーーーバイト帰りに鼻歌など口ずさみつつ、考えてみる。インターネットの世界では、高所から、他人を斬る仕草が流行っている。悲報。またか。クズが。死ねーーーーそれら言葉の奥には深い仔細はない。しかし、はっきり言える事は、彼らもまた、もはや人間という実像を失っているという事である。彼らはネットに書き込んでいる時、もはや一つの言葉の世界に溶け込む一滴である。憎悪と嫉妬の海の中の一滴にすぎない。こうした所でもやはり、人間の個体性の喪失という深い問題はしっかりと根を張っている。

私という存在ーーー存在ともいえない私の存在は、一体、何に対して過ぎ去るのかーーーーー私もまた、小林秀雄を模倣して考えてみる。私という人間には一片の価値もない。何の値打ちもなければ、何ら誇る事もない。・・・そして、あるいは、私がもし誇る所があるとして、それが一体、何なのか。それが、私という人間と一体、何の関係があるか。・・・私達が、幸福だ、価値があると見ている、家族、地位、といったものは、大抵の場合、その見かけを保つために、その内部の人々が踏ん張っている姿を映しだしたものに過ぎない。私が今、その事を痛感している時、私が何故、そんな見かけを保つために、今更、ふんばろうとするのか。

人々の幸福という概念は、死というものに対する弱い抵抗を示している。親は子供に期待を抱くが、子供はそれに答えられず、また、その子供に期待をつなぐかもしれない。この死とのレースはずっと、続くのかもしれないが、しかし、個体としての死の空虚は、やはり確実なものとしてそこにある。私達が長生きとか、家族仲良しとか、いくら言ったところで、明日死ぬ人間と、八十五年生きて死ぬ人間との間には、時間的な隔たりしかない。結局、死ぬものは死ぬのだ。

私が死ぬとしてーーーそして、私という人間が、社会にかすり傷一つ与えられない、無のような存在としてあるとする。そして、私が愛した人間もいなければ、私を愛した人間もいないーーーーー何故なら、個人的感情も全て社会化されているからーーーーーとすると、私の一生という私の経験の総和は一体、何に対して過ぎ去るのか？・・・。だが、そんな問もむなしいほど、答えは明確だ。答えは無だ。私は取り替え可能な存在であり、そして、私という人間は、誰からも観察されたことのない存在だ。観察されていない物は存在しない。現代物理学の常識だ

ろう。
　人々の価値観に、私が迎合できないものがあるとして、それが一体、何か。人は様々な事を言うが、そのほとんどは、自分の内に明確な尺度を持っていないがために、社会の尺度へと迎合する。そして、現今の社会の尺度とはおおむね、形骸化し、退廃化したものに見える。・・・別にそこまでいかなくても、私にはごく「普通」の観念に適する資格のようなものすら持っていないのだ。だから、私は無ーーーーーだが、私は無にとどまる。
　私が無にとどまるのは何故か？？・・・そして、ここで、問いは止まる。何故なら、おそらく、私という存在の本性は、この無にとどまるという性質にあるからだ。私には、カフカや、たとえば、ランボーのような、いわば、人々の世界から背を向けた存在に共感する事が許されるだろう。彼らは自己を守る為に、まず、世界を捨てたのだ。例えば、ランボーの背中に、世界は追っかけてきたが、彼はそれを蹴り飛ばした。だが、個人と社会では、その勝敗は見えている。・・・だからこそ、彼は敗北したが、彼の敗北は自身の宿命の必然だった。勝ったもの、負けたもの。だが、巨人と戦おうとした人間が皆無だったように、戦おうとした者自体が全くといっていいほどいなかった。最初から勝敗がない者に対して言う言葉はない。彼らは永遠に、無以前でとどまるだろう。
　私は消えていく。私は過ぎ去っていく。私は、人々が作り上げた虚像に、その信念に背を向けた事で、こうして罰せられるのかもしれない。私の中の空無と充実は全て、おそらくは、私が生み出したものに違いない。私がたとえ、大馬鹿者にせよ、私は私が大馬鹿である事を選択した大馬鹿者だったという事は言える。人々において、私はもはやかける言葉はない。私は断罪されるが、それ対するうめき声も、誰にも聞こえないのだから。
　だとしたら、私という存在は何か。世界に一瞬、灯火した、私自身にしか見えない、瞬間の流星だったというのか。私はもうすぐ燃え尽きるのか。そして、それを見るのは私だけなのか。
　この問いに答えはない。私は走る。すると、残像が残るかもしれない。私は存在しないにせよーーーー少なくとも、自分自身に対してだけは、激しく存在した、という点を明らかにしたい、そういう生き物なのだ、私は。